

『世論時報』

2011.4

(吉本和之インタビュー)



国際教養大学の中嶋嶺雄学長

がしなかったからである。
女性職員は済まなさそうに、「一軒ありますが、今日は休みですね」と言った。私は昼食を取るのを諦め、45分後に到着する大学行きのバスを待つことにした。

3月初旬で雪がまだ残る、小雨が降る寒い日だった。駅周辺以上に辺鄙な場所にあると思われる大学に、各地から若者が押し寄せることができます。不思議だった。
いつも2、3分待つだけで、次の電車がやって来る都心の交通事情に

慣れている者には、45分間の待ち時間は長かった。

バスには、国際教養大学の学生と思われる一人の若い男性と、私の二人だけが乗客だった。途中のバス停で、いきなり厳つい顔のヨーロッパ系の男性が乗り込んで来たことで、国際教養大学に向かっていている実感がして来た。辺鄙だと思ったのは私の錯覚で、秋田県の県立中央公園、陸上競技場などのスポーツゾーンの一角に大学はあった。

およそ15分で、バスは大学敷地内にあるカフェテリア（学生が食事をする施設）前に横付けになった。私は簡単に昼食を済ませようと思い、カフェテリアのドアを開け、中に一歩入った時に目を見張った。

明るく開放的で大きな室内の柱には、30インチくらいのTVが掛けられ、外国の映像が流れていた。傍によって見ると、渦中にあるリビアのカダフィ大佐のインタビューを放映している。それは、BBC（英国放送協会）ワールドニュースの番組だった。

大学での講義は、すべて英語で行なう国際教養大学ならではの、配慮だろうか。昼食の時間帯が過ぎていたこともあって、見かける学生の姿は2、3人だけで、様子を見ているとTVに眼を凝らすふうでもなかった。

それにしても、他大学の学生食堂で衛星放送を流している光景を見かけることがない。若者に世界の動きと直接に関わることの大切さを説く大学は多いだろう。だが、TVをセツトし、衛星放送を利用して各国のニュース番組を常時見ることができないようにしている大学は、他に知らない。

15年前に知っていた 学長になった人の名前

この日の一番の目的は、中嶋嶺雄学長に会うことだった。国際教養大学のことは、TVが取り上げて紹介していることを知っていた。それを横目で見ながら、一風変わった大学ができたものと眺める程度で、学

長の名は、私が知る中嶋嶺雄氏と同姓同名の別人だと思っていた。

かつて、日中関係の数少ない論者に、中嶋嶺雄という人がいた。中国が今日のようなになる以前、書記長だった鄧小平が開放政策を打ち出し、深圳を経済特区に定め、共産主義国で経済発展の一大実験を開始した頃である。

多くの人が、開放政策を眉唾的に眺めている中、的を射た中嶋嶺雄氏の論評は刺激的で、その著書の愛読者だった私は、うる覚えで氏の肩

書に「東京外国語大学学長」と記されていたことを憶えていた。

その時から、15年以上の月日が流れている。一体、どのような経緯があつて、秋田県が創った公立大学法人国際教養大学学長に就いたのだろうか。そのことは、氏の著書を開くこと以上に興味が募った。

面会の約束は、午後3時から40分間と限られていた。電車とバスを乗り継ぎ、大学に着くまで約5時間。たとえ10分間でも一度言葉を交わしたいと思うほど興味津々だった。それは、国際教養大学が、今の日本のどこを探してもない大学であることが判ったからである。

カフェテリアを出た私は、学長秘書を訪ねるため、大学事務室に向かった。面会1時間前のことである。電車とバスの時刻からして、大学に到着する時間帯も限られたものだった。学長に面会するまでの時間を利用し、校内を案内してもらうことになった。

事務室のドアを開け、入口付近のデスクで仕事をしている女性職員に

学長秘書室はどこかと尋ねた。その職員の応対は、活気ある民間企業の事務社員以上に気品あるもので、およそ大学事務職員のものではなかった。見渡せば、同じような雰囲気は事務室全体に感じられる。

開学して月日が浅い大学なら、あり得るだろうが、5年経過している。気品ある活気は、どこから醸し出されてくるものか、学長に聞いてみたいと思うことが一つ増えた。

私の前に現れたのは、学長秘書ではなく、キャリア開発室長の源島福己氏で、学長室前にある応接室に案内され、そこで「国際教養大学PR用DVD」を観ることになった。

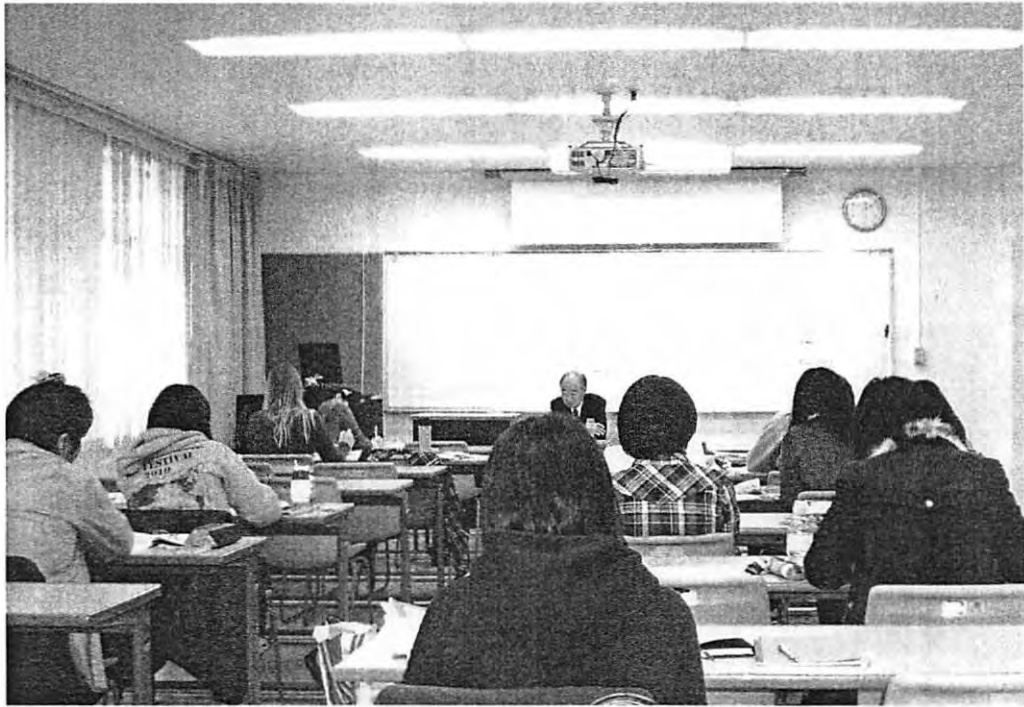
DVDが映し出した 6項目の方針・目標

私はそのDVDの作り方に感心したが、それ以上に、源島氏との話しを通し、役割分担が明確になっていることに、従来の大学にはない大学組織を見る思いがした。

よくできていると思ったDVDに

カフェテリアの柱に掛けられたTVでは、BBCワールドニュースが流れていた。





10分間だけ聴講した明石康教授（元国連事務次長）の講義。日本人と外国人学生が席を並べ、英語での質疑応答で講義が進められていた。

話を戻そう。「百聞は一見にしかず」という諺がある。国際教養大学が掲げた特色が、次の6項目である。

- 一、授業はすべて英語
- 一、1年間の海外留学を義務化
- 一、キャンパスは異文化空間
- 一、少人数教育と面倒見の良さ
- 一、徹底した就職支援
- 一、ユニークな入試制度

と単純明快であるが、その背後には大学側の並々ならぬ決意と行動が潜んでいる。一例をあげてみれば、国際的な舞台で行動できる人間が、現代の日本には極めて限られていることへの挑戦がある。若者が自らの限界に挑み、一回りも二回りも自分の器を大きくする機会を、この大学はつくろうとしている。

DVDが映し出した映像は、実際に取り組まれたものである。6項目の特色、目指すものが100パーセント達成されているとは思われないが、ラストシーンで卒業生が全員で帽子を投げ、喜びを露わにする映像は胸に迫るものがある。

それは、6項目の特色・目標に基

づいて展開されるカリキュラム（教育活動計画）に沿い、昼夜を問わないハードな勉学を4年間経ての一瞬间であるからだろう。実の父母でなくとも、学生たちの姿に感動を覚えるのは、そのためである。

見終わったDVDの映像の一端を、自分の目で確かめることになった。源島氏と一緒に最初に訪れた場所が、明石康教授（紛争予防外交論）の講義室だった。すべて英語で進められる教授と学生の質疑応答を見聞した。わずか10分間だけだったが、日本の秋田市にすることを忘れてしまふほどで、私は講義室の窓から見える残雪に目をやって、我を取り戻したほどである。

それから学内を一巡して訪れた24時間利用できる図書館は、圧巻だった。閲覧席300、図書6万冊、雑誌・新聞150種、2300タイトルの視聴覚資料は、海外のものが多くという、その量に圧倒されるわけではない。

閲覧席に座ると、天空から我が頭上に世界の賢人の知識が降り注いで

くるような錯覚に陥る。その場の雰囲気は、向学心が薄い者にも勉学意欲に火をつけるには十分である。図書館を見学した高校生が、この大学に入りたいと思う心境が解るような気がする。近くにあるなら、毎日でも通いたいと思わせる図書館であった。

国際教養大学が他大学と決定的に異なること

学長室は、学長秘書室の奥にあった。秘書の鈴木和代女史に、面会取り次ぎの労に対するお礼を述べ、私は学長室に入った。席を進められる前に、面会の時間を頂いたお礼を言った。その後、唐突だったが、学長を前提に開学準備に入ったのかどうかを聞いた。

それは、国際教養大学が公立であるにもかかわらず、国内の国立、私立を含めた他大学と決定的に異なるのは、中嶋学長の人生体験と思想が前面に出て運営されているように思えたからだ。中嶋学長は、

「準備委員会には、第一線で活躍されている錚々たる方が各地から来られていましたし、私が学長になるとは思っていませんでした。国際社会に通用する若者を育成する方法については、いろいろな意見を述べさせてもらっていましたが……」

と話した。私が、「言い出しつぺに、お鉢が廻ったのでしょうか」と言うと、

「そうではなくて、東京外国語大学で学長をしていた実務経験があるということで、押し切られた格好になりました。日本における大学は、このようなものが必要だというイメージがあつたので、私自身の挑戦として、お引き受けしました」

理想の実現は、それが高ければ高いほど難しくなる。開学から5年後の現在、実現の段階はどこまで来ているかを聞きたいと思ったが、それは愚問だと気づいて止めた。

教育には100年の計を必要とすると言われる。理想の実現は、幾多の卒業生の社会貢献度が物語ることになるからであろう。

その質問の代わりに、明治5年頃すでに英語で教育をする学校に通っていた嘉納治五郎（柔道家・教育家・日本人初の国際オリンピック委員）のことを引き合いに出し、日本における英語での教育について尋ねてみた。

中嶋学長は、嘉納治五郎と同期の岡倉天心、新渡戸稲造らが英語力とともに立派な教養を身につけ、英語圏の欧米人と対等に接したことを評価した。そして、「教養」を身につけることの重要性を語り、三氏以上に恵まれた時代に生きる今の若者は、自分の可能性を最大限に伸ばし、国際社会で活躍してほしいと言った。

事務室に漂う気品ある活気、図書館の天空から降り注ぐ知識のシャワーの源が、学長室にあるのかどうかを確かめるには、40分という時間は短かった。

中嶋嶺雄学長に、「またお訪ねします」と言つて、私は学長室を退室した。

（本誌・吉本和之）

を直接体験することで、自分が本当に学んで行きたいことなのか、向いているのか、ということも確かめることができる。

大学は専門的な技術だけを教えればよい場所ではない

就農者の数は減少の一途を辿っている。農業だけでなく、第1次産業や第2次産業に関わる就業者が減っていることは周知の通りである。社会の多様化により、職業も多種多様になったため、自ずと第1次、第2次産業に関わる就業者が減ってきた。

食物も日用品も海外で生産した安価な製品が溢れ、不景気な中でそれらの売上が伸びるため、国内の生産者や製造者の賃金は上がらない。この悪循環の中で、賃金の面だけでなく、生産者や製造者に見合った評価がされているとは言い難い。

しかし、この人々の技術が基礎となり、社会を支えていることは今も昔も変わらない。日本人の器用さや綿密さ、勤勉さから生まれた技術力は高い。その専門性をもっと高く評

価し、社会的にも位置付けることは、これからの日本の社会のために大切なことである。

大学は「教育機関」と、「研究機関」の両面の役割があったが、最近では、就職率で大学の優劣を比べるようになるなど、「就職予備校」的な役割も求められるようになった。学生達が社会の現場でもやって行けるように、手に職をつけさせることが今後より以上大学に求められる。

しかし、専門的な技術だけをただ身につけることは手に職をつけたことにはならない。東京農大のようなプログラムを通して、「伝える、表現する」といった基礎能力を身につけるとともに、協調性や思いやりなどの「人間性」の部分までを教えられてこそ社会に出て恥ずかしくない学生を育てたと言えるのではないだろうか。

それぞれの大学が持っている専門性を活かしながら、現代社会に必要とされる人材を育てられる仕組みをもった大学が増えることを期待したい。

(本誌・林 民子)



緑に囲まれた新病院の一部風景（全館冷暖房完備）

精神科●神経科●内科

医療法人

静和会

中山病院

千葉県市川市中山 2-10-2 tel0473(34)3480代

若者が注目する秋田の国際教養大学を歩く

24時間利用できる図書館の 灯りが向学心を熱くさせる

「大学改革」が声高に叫ばれ10年が経過した。日本経済の停滞などが影響し、卒業生の就職がままならない昨今、定員150名のところ、各地から1000名を超える受験者が押し寄せる大学が、秋田市街から離れた所にある。

電車を降りた駅で
45分間バスを待つ

目当ての国際教養大学に最も近い
JR駅が秋田駅から二つ目の和田駅
だった。

一人の女性駅員がいるだけの駅
で、「この付近に食事ができる店は
ありますか」と聞いてみた。一見し
て、それらしい店がありそうな感じ



24時間利用できる図書館(上)。
正面から見る国際教養大学(下)。

社会浄化をめざす●せろん じほう

世論時報

平成23年

4

昭和43年8月23日第三種郵便物認可
平成23年4月1日発行毎月1回1日発行
第44巻第4号（通刊719号）

特集 変化が求められる大学

●発言

大地震・津波被災・原子力発電所惨事

●診療室から

3Dテレビ、ゲームは8歳未満には要注意

東光西風

未曾有の困難をのりこえて新しい時代へ

子どもたちのメッセージ

体重を減らし続けて
もっと自分を好きになりたい

昭和43年8月23日第三種郵便物認可

